

‘this was the Gods doing’ Cornelius Burges の断食説教と火薬陰謀事件記念説教

高 橋 正 平

序

1640年11月17日ピューリタンの Cornelius Burges は断食説教 (Fast Sermon) を下院で行った。Burges は約1年後の1641年11月5日には慣例に従い、火薬陰謀事件記念説教を下院で行った。Burges が断食説教を行った1640年11月17日は長期議会が開催されて2週間後であった。1641年と言えば前年11月3日に招集された長期議会が1年目を終えようとしていた年で、ピューリタンがチャールズ一世との対立を徐々に深めていった年でもあった。国外では1641年10月23日にアイルランドで反乱が起こった。アルスターのカトリック教系農民が多数のプロテスタント植民者を殺害したのである。Burges の説教はこのアイルランド反乱から間もない説教であった。1641年の Burges の説教はピューリタンによる最初の火薬陰謀事件記念説教であった。筆者はこれまで国教会派の説教家による火薬陰謀事件説教を論じてきたが、ピューリタンという国教会とは異なる宗派の説教がそれまでの火薬陰謀事件説教と異なるところがあるとすればそれはどこにあるのかという大きな問題が生じてくる。小論では Burges の二つの説教を取り上げ、彼のピューリタンとしての特徴がどのように表れているかを論ずることを目的とする。小論では両説教は「救出」(deliverance) と密接な関係にあり、その「救出」を論ずるために Burges は徹底して旧約聖書を使用した。なぜ彼は旧約聖書に頼らなければならなかったのか、この問題の解明と次に両説教とも1640年代初期のピューリタンが直面していた問題を抜きしては行われなかったことを究明し、最終的に Burges の両説教はピューリタン革命を後押しする説教であったことを論じる。

1. Burges の *The First Sermon* における「救出」

Burges は1641年11月5日に火薬陰謀事件記念説教を行ったが、前年1640年11月17日に断食説教と称する記念説教を行っている。この断食説教は火薬陰謀事件説教と内容的に密接な関係があるので、最初に断食説教について論じたい。断食説教の聖書の一節は「エレミア記」50章5節で、それはバビロンの没落とバビロン捕囚からのイスラエル人の帰国の預言である。なぜ主はバビロンの没落とイスラエル人の帰国を預言したのか。それはユダヤの民が「永遠に忘れることのない契約」を主と結んだからである。なぜイスラエル人がバビロンに捕囚されたのか。それはイスラエル人が主に対する敬虔な態度を忘れたからである。それではなぜイスラエル人はバビロンから帰国できたのか。それはイスラエル人が主への信仰心を改めたからである。Burges が断食説教を行ったのは1640年11月17日であるが、それはピューリタンが徐々に勢力を獲得し、革命が本格化する2年前である。しかしピューリタンが勢力を得たとは言え、彼らはその目的を達成するにはまだ意志の統一が不十分だった。それで国家の罪を嘆き、神の恩寵を願う目的で断食説教を行うことになった。断食によって人々がへりくだり、神の許しを願う試みであった。ヒルは言う。

National fasts and days of national humiliation were attempts to appease God. For month after month from November 1640 the two Houses duly listened to denunciations of idolatry, profanation of the Sabbath, contempt for ministers, sectarian preaching, etc.: and to prayers to God to continue his favour to England. But it soon became clear that outside Parliament the fasts were not taken seriously as might have been wished⁽¹⁾.

断食は我々の罪に怒りを発する神をなだめ、許してもらう一つの方法であった。ピューリタンの改革が実現するには神の許しが必要だったのである。いわばピューリタンの革命の成功の後押しを神に求めたのである。Burges が「エレミア記」を持ち出したのはイスラエル人がイギリス人にとって神の加護の

前例となるからである。Burges が説教に使った「エレミア記」50章5節は「かれらは顔をシオンに向けて、その道を問い、『さあ、われわれは、永遠に忘れられることのない契約を結んで主に連なろう』と言う」である。ピューリタンが革命に勝利を納めるには「永遠に忘れられることのない契約」を主と結ぶ必要がある。Burges の *The First Sermon* 全体はイギリス人が主と契約を結ぶ必要性を説き、その結果としてのピューリタンの勝利、イギリスの繁栄が約束されることを聴衆に訴える。国教会派説教家の火薬陰謀事件記念説教も聖書を十分利用していたがピューリタン説教家の聖書重視は国教会派説教家をはるかにしのぐ。ピューリタンはすべての行動の規範を聖書に求める。Burges の断食説教における断食と主との契約についても Burges は旧約聖書の中にその前例を見いだす。Burges は次のように言う。

Consider that it is the proper and chiefe businesse of a *Fast*, to enter into *Covenant* with God. You see it to be the practise of the Church in *Nehemia's* time. And where this has been omitted, the *Fast* hath been lost⁽²⁾.

そして、断食の結果として彼らは繁栄を見ることになる。

...they [the people who returned from Babylon] were never in a thriving condition, till *Nehemiah*, by the good hand of God, lighted upon this course. Some *Fasts* they had kept before, yea very many; but they never thrived, till he added to their publique and solemne *Fasting*, the fastening of them to God by a *solemne Covenant*. Then, the worke of Reformation, and establishment, went on merrily, then they prospered⁽³⁾.

断食を行い、神との契約を結ぶことによる繁栄は既に旧約聖書に見られることである。だからピューリタンも断食を決行し、そして神との契約に入るのである。それは「永遠に忘れられない契約」であり、永遠に神からの加護があることの証となる。ネヘミアはバビロン捕囚から帰国したのであるが、Burges はバビロンからのイスラエル人の帰国を神による救出の原型の一つと考えている。

なぜユダヤ人はバビロンから帰国できたか。それは単なる帰国ではなく神による救出である。バビロンはいつも「教会がこれまでに感じたなかでもっとも傲慢な、重大な、憎い、残忍な敵」で、バビロンの暴力は支持できず、傲慢さは耐えられず、血の飢えは飽くことを知らないものであった⁽⁴⁾。なぜイスラエル人は救出されたか。それは「エレミア記」でそれが預言されているからである。主はイスラエル人に主を知り、帰国し、主の民となる心を与えたのであり、それは契約なしではありえないことである⁽⁵⁾。旧約聖書では他にもイスラエル人の救出が預言されているが、「エレミア記」31章31節で主はイスラエル人を幽囚から帰国させると約束したあとで「見よ、わたしがイスラエルの家とユダヤの家とに新しい契約を立てる日が来る。この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはその私の契約を破ったと主は言われる。しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家を立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法をかれらのうちに置き、その心にするす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主はいわれる。⁽⁶⁾」と付け加えている。主は怒りのあまり民を敵に渡しても再び救ってくれるが、それは主の慈悲のためである。イスラエル人の捕囚はイスラエル人の主への不信であるが、そのイスラエル人ですら主は再度救ってくれる。Borges がバビロン捕囚を主の救出の原型と考えるのはその救出には主の無限の愛、慈悲が反映されていると考えたからである。ピューリタン革命を推進する Borges にとって思うように革命が進行しないのは理解できない。Borges からすればバビロンは革命前のイギリスとなり、捕囚から帰国するイスラエル人はピューリタンとなる。旧約聖書ではイスラエル人が神との契約を結んだ結果として、バビロンから帰国できたように、イギリス人も神との契約を結べば、チャールズ一世を打倒し、新しい神の国の建設が可能である。Borges はピューリタン革命がうまくいかないのはピューリタンが神をおろそかにしているからだと考えた。ピューリタンはもっと真剣に神を考える必要があり、軽々しく神を考えるべきではない。ピューリタンの革命が足踏み状態なのはピューリタン一人一人の神への熱意が失せているからである。だから神との契約が何よりも重要で、この契約が

なくてはピューリタン革命は失敗に終わる。バビロンからの帰国はいわば「バビロンからの救出」である。Burges は断食説教で幾度となく「救出」を強調するが⁽⁷⁾、その「救出」はまた火薬陰謀事件からの救出にもつながるものなのである。バビロンからの救出において神がイスラエル人に期待したものは“the firme and solemne tying and engaging of themselves by a formall and effectuall Covenant to him, and remembring and keeping of it better than formerly they had done⁽⁸⁾.”であった。それは神との契約とその契約を忘れないことである。神との契約を忘れずにいるということは絶えず神に対して敬虔な態度をとることで、この謙虚な神への姿勢なしでは神は恩寵や慈悲を垂れることはしない。チャールズ1世王政を打破し、新しい神の国を作るには人間の力だけではどうにもできない。神の援助なくしては何事も達成できない。バビロンでイスラエル人は「神との厳粛な契約⁽⁹⁾」に入ったから救出されたのである。それでは契約とは何か。Burges によれば契約とは二人もしくはそれ以上の人との間の同意または協定に他ならない。

A Covenant is nothing else but an agreement or bargain between two or moe persons, and ratified (ordinarily) by some externall solemnitie, or rites that may testifie and declare the agreement, and ratifie it, whereby it becomes unalterable⁽¹⁰⁾.

契約は儀式によって承認される必要があり、Burges の場合は断食という儀式的なかで神へへりくだりを示すことによってなされる。この神との契約は一回限りのものではない。いかなる救出を受ける際に神との契約を新たに行う必要がある。そして神はその契約を覚えており、救出を行うのである。それは神の無限の愛によるものであるが、それはまた神の“fidelity”, “mercy”, 変わらぬ愛でもある。いうなれば救出は“a thread drawne out of the bowells of his Covenant⁽¹¹⁾”なのである。人が神との契約を守り、敬虔な姿勢を神に示す限りは何度も神は救出を行ってくれる。逆に神に対して傲慢な態度をとり、神をないがしろにする場合神はその人を見捨て、救出を行うことはしない。バビロンが滅びたのはまさしくバビロンの神への不遜の結果に他ならない。バビロン以外にも神への

敬虔な姿勢を失ったがために滅びた人や国は多々ある。Burgesの言わんとすることはピューリタンがもっと神に対してへりくだりの態度を示さねばならないということなのである。この神へのへりくだりがあるって初めてピューリタンの革命は勝利が確約される。Burgesは今一度ピューリタン引き締めを訴え、一人一人の意志の統一を図ったのである。そのためにピューリタン必要されるものは神への信仰と自らのへりくだりである。断食はこれら二つをピューリタンに自覚させる絶好の機会であったのである。

2. “Old Babylon” と “New Babylon”

Burgesにとってバビロンは象徴的な意味合いを持つ。バビロンは言うまでもなく新バビロニアのネブカドネザル二世が、イスラエルの南王国ユダを滅ぼしその住民を強制移住させた地である。バビロン捕囚は故国を追い出されたイスラエル人にとってはその後の苦難の歴史の始まりであったが、バビロン捕囚期の精神的労苦は逆にイスラエル民族の団結心を強化し、彼らの信仰を更に深める契機ともなった事件である。Burgesにとってバビロンはイスラエル人にとっての苦難の土地であり、神を冒瀆し、物質的繁栄をひたすら追い求めた悪徳の土地である。イスラエル人にとってバビロンがいかに傲慢で、血に飢えた土地であったかを Burges は次のように言う。

Because *Babylon* (after once the Church was put under her power) had always been the most insolent, heavy, bitter, bloody enemy that ever the Church felt. The violence of *Babylon* was unsupportable, her insolence intolerable, her blood-thirstiness insatiable⁽¹²⁾.

バビロン捕囚はイエスの十字架上での苦しみと匹敵する苦難をイスラエル人に体験させた。バビロンはイスラエル人にとっては屈辱の隷属の場であったが、それが新約聖書・黙示録では “Babylon the Great, the Mother of harlots and abominations of the earth⁽¹³⁾” (大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべきもの

らとの母) と徹底的に悪徳の象徴として描かれる。イスラエル人は「鉄のくびき」のもとにあり、「溶鉱炉」の中に投げ込まれた。なぜイスラエル人はそのような過酷な状況に追いやられたのか。それはイスラエル人が神を忘れたからである。イスラエル人は神との契約を破棄し、そのためにイスラエル人はバビロンの力に屈服せざるをえなかった。いうなればイスラエル人は神との結婚を解消した結果がバビロン捕囚をもたらしたのである。

It was for such a fault as dissolved the very marriage knot between God and his people: it was for *going a whoring from him*. For this it was, that God first *put away Israel*, giving her a Bill of Divorce, *Ier.3.8*. And for this it was, that he afterwards cast *Judah* also out of his sight, *2 King.17. 19,20*. And as it was in former times, so in later Ages of the world⁽¹⁴⁾.

イスラエル人の神への忘恩が彼らをバビロンへと追いやることとなった。いわばバビロン捕囚はネブカドネザルによるイスラエル人の強制的なバビロンへの移住ではなくその元はと言えばイスラエル人の神への冒涇であった。上記の引用文の最後の一文は Burges の考えを端的に示しものとして興味深い。「過去の時代にそうであったから、世界の後世の時代にもそうである。」これはバビロン捕囚を経験したイスラエル人と同じ事がイギリスに起こることを示唆している。バビロンがエルサレム征服後に偶像崇拜がはびこり、“whoredomes”と“filthiness”に身をさらすことになった⁽¹⁵⁾。しかし Burges からすればバビロンのエルサレム征服はチャールズ一世下の宗教状況と比べると「ノミにさされた」くらいである。

Most of you are well sene in the History of the Church, and can soone point with your finger to the times wherein *Babylon* began to besiege *Hierusalem*, and *Antichrist* began to pull of his vizzard, in the Churches of Christ: even then, when *Pictures* and *Images* began first to be set up in *Churches*, for *remembrance*; then, for *ornament*, then, for *instruction* too; and at last, for *adoration* and worship. Then, God suffered her to

be over-run, and over-spread by *Babylon*, as by an hideous *opacum* or thick darknesse, and to be exposed and prostituted to all manner of whoredomes and filithinesse: so as the slavery of the Jewish Church in old *Babylon*, was scarce a flea-biting, in comparison of the miseries of the Church Christian under the *New* [Babylon], which makes havock and merchandise not of the *bodies* only, but even of the *soules of men*, Revel.18.13⁽¹⁶⁾.

Burges は1640年代前の国教会がカトリック教化していた状況をバビロン征服下のエルサレムと見なし、チャールズ一世統治のイギリスを「新しいバビロン」と述べている。それは Laud 大主教の下での国教会の現状をも示す表現で、Burges の説教時のイギリスは「新しいバビロン」なのである。イギリス国民は「新しいバビロン捕囚」の下にある。しかし「新しいバビロン捕囚」からイギリス人はかならず救出される運命にある。なぜなら「古いバビロン捕囚」からのイスラエル人救出が神の書で実証されているからである。「古いバビロン」ではイスラエル人は神との契約を忘れ、異教的な偶像崇拜の罪を犯し、神の怒りを買った。それが結局は彼らをバビロンでの苦境へと追いやった。しかし、バビロン捕囚はイスラエル人を試練の場へと送り出し、彼らの神への真なる姿勢を試す場ともなった。イスラエル人は神への冒瀆のためにバビロン捕囚の苦渋を飲まされたが、バビロンはイスラエル人以上に神を冒瀆した。なぜイスラエル人がバビロン捕囚から帰国できたかと言えばそれは神冒瀆に対するバビロンの罰のためである。それにバビロン捕囚の苦難の体験からイスラエル人が再び真なる神を求めたからに他ならない。そしてイスラエル人は再び神と契約を結ばなければ、彼らは救われないと考えたからである。

Now then, when God pleaseth to deliver a people from such bondage, and to awaken them effectually to look up, and to respect even with astonishment upon those great and gastly sins of theirs, which had cut asunder the cords of the Covenant between God and their Soules, and provoked God to subject them to so much bondage; and that they must either renew Covenant, or to be obnoxious to more wrath,

and be laid open to more and greater temptations and sins; this cannot but exceedingly work upon their souls, causing their hearts to melt, and their very bowels to yearne after the Lord, to enter into a new, *an everlasting Covenant that shall never be forgotten*⁽¹⁷⁾.

バビロン捕囚はイスラエル人の神への背反の結果であり、捕囚に追いやられたイスラエル人が再度神との和解を試みた捕囚でもあった。バビロンから帰国したイスラエル人は自らの罪を悔い改め、神との契約を結ぶことを忘れなかった。イスラエル人が栄えたのは彼らが「決して忘れられない永遠の契約」を神と結んだからである。Burges がバビロン捕囚を重視するのは捕囚の原因がイスラエル人の神からの離反であり彼らのバビロン捕囚の苦境からの脱出は神との和解以外に救済はないことをイスラエル人が再認識したことにある。バビロン捕囚は言うなればイスラエル人が生まれ変わる契機ともなったのである。苦難の道を歩まざるをえなかったイスラエル人がその苦難の故に真の神を求めるきっかけをこの捕囚から学びとったのである。その意味ではバビロン捕囚は無意味な捕囚ではなかった。イスラエル人再起の、イスラエル人目覚めの捕囚であり、イスラエル人復興のかけがえのないチャンスの到来でもあったのである。

Burges にとってバビロン捕囚は単に歴史的な過去の事件であっただけではない。Burges にはバビロン捕囚は神のイギリス「救出」の先駆けともなるべく救出であった。この説教が行われた1640年はピューリタンにとっては彼らの改革が順調に進まない困難な時期であった。その理由の一つはチャールズ一世と側近 Laud 大主教のピューリタンとの対決姿勢であった。チャールズ一世と Laud 大主教はピューリタンが主張する国教会におけるカトリック教的な儀式、偶像崇拜撤廃に対して逆流する姿勢を示していた。そのような状況を Burges は「新しいバビロン捕囚」と呼んだ。ピューリタン革命の遅れの二番目の理由はピューリタンの信心の薄弱化にあると Burges は考えた。ちょうどイスラエル人がバビロン捕囚に陥った理由が彼らの神への背信行為であったように、ピューリタン改革が予期したとおりに進まない「新しいバビロン捕囚」に陥ったのはピューリタンの神を求める気持ちに油断があるからだとして Burges は考え

た。だから Burges は断食をピューリタンに求め、神へのへりくだりの姿勢を見せ、自らの罪を悔い、新たに神との契約を結ぶ必要性を説いたのである。彼にとって神との契約なしでは何事もなしえない。逆に神との契約を結べばすべてが順調にいく。それは民族を、国家を繁栄へと導く。なぜ Burges はかかる神との契約を強調するのか。それはすべて聖書に書かれているからである。つまりピューリタンが歩むべき行動の指針が聖書に既に見られるのである。だから Burges は幾度となく繰り返し聖書を持ち出し続け、ピューリタンは聖書に従って生きなければ彼らに将来はないことを言い続けるのである。1640年11月17日の *The First Sermon* は以上のような Burges の主張をピューリタンらしく述べている説教で、神との契約がピューリタンの、イギリスの将来を保証してくれるのである。

Burges にとってバビロンは単なるバビロンではない。Burges は救出を「個人的な救出」と「全国家とともに神が我々に与えた公的な際だった光栄ある救出」を挙げる。後者の救出は1588年のスペイン無敵艦隊によるイギリス襲来と1605年の火薬陰謀事件に代表されるが、Burges は更に「特に何年前に我々の間で始まった神の恵みを受けた宗教改革によるバビロンからの我々の幸せな救出⁽¹⁸⁾」と述べている。Burges の最後の言葉から我々は Burges がバビロンを1640年以前のイギリスとして捉えていることが理解できる。旧約聖書ではバビロンは悪徳の巣であったが Burges はチャールズ一世のイギリスはそのバビロンに匹敵する悪徳の国であると考えている。ピューリタンはその悪徳の国家からの救出に奮闘し、新しいイギリス建設を図っているのである。ところがピューリタンによる宗教改革は遅々として進まない。それはなぜか。人々の神への信仰心が薄らいできているからである。たとえば火薬陰謀事件である。イギリスは過去の歴史に類を見ない残虐事件から救出されたが、その後人々の事件への関心は弱まり、断食やへりくだりによって真摯に神を求める姿勢は見られない。Burges が主張する神との契約が無視されつつあるのがイギリスの現状である。かくして人々はまた罪へと陥っていく。

This is the end of all who make not the *Goodnesse* of God, a prevailing motive thus to

joyne themselves to the Lord; they fall into moe, and greater sinne, and abominations; and so adde daily to that great heape, and to those Sea's of divine wrath that hang over their heads, to overwhelme and confound them foe ever⁽¹⁹⁾.

ピューリタンの改革が前進しないのはイギリス人がまさにバビロンと同じ状態にあるからである。Burges はなぜ神はバビロンからの完全な救出を我々に与えないのかと次のように述べるが、そこでもバビロンはイギリスの現状を意味している。

Why God hath not yet given us so full a deliverance from *Babylon*; why there have been so many ebbings and flowings in matters of Religion, yea, more ebbings and flowings⁽²⁰⁾;

ここで Burges はピューリタン改革の停滞を嘆くが、それはまさしくイスラエル人がバビロンにいたときと同じ状況である。なぜ改革は進まないのか。人々の不満は最高潮に達し、現状の悪の治療法が現れるとすぐそれは消滅する。神が王に国会召集へと心を動かしているのに次から次へと分裂が様々な方面から生じてくる。だからキリストの王国と布告をより純粋な形で樹立する代わりに教義や崇拜において相反する混合やら腐敗が出現しているのが現状である。“*Arminianisme, Socinianisme and Popish Idolatry*⁽²¹⁾”が洪水のごとくイギリスに侵入している。イギリスにこのような混乱を引き起こしたのは何が原因か。まさにイギリスは真の宗教を忘れたバビロンの名にふさわしい。このバビロンを打破し、イギリス人を真の故国へと連れ戻さねばならない。真の故国への帰国によってピューリタンの改革は勝利を得る。Burges はこのように考えた。Burges はチャールズ一世下のイギリスをバビロンにたとえた。彼以前の英国国教会の説教家が盛んに利用した「適応」の手法である。聖書の記述を現在のイギリスに適応することによって、イギリスの行動行の前例、見本を聖書に見出し、それによって自らの行動の正当化を目指したのである。Burges にとってバビロンは彼らが打破すべきチャールズ一世のイギリス国家である。ところ

がピューリタンによる国家改革はいっこうに日の目を見ない。バビロンからの救出は完全に終わってはいない。Borges は改革の遅延をイギリス人の神への祈りと断食が不十分であったからだと結論づける。

What is a chief cause of all this? Have we not *prayed*? have we not *fasted*? Have we not had more *Fasts at Parliaments* of late, than in many yeares before? Yea, hath not there been, generally among Gods people, more frequent humiliations, more frequent seeking of God, notwithstanding the malice and rage of some men to discountenance and suppress it, than in former times? Why then is Deliverance, and Reformation so slow in comming?⁽²²⁾

Borges にとってバビロンは単にチャールズ一世下のイギリスだけでなく、チャールズ一世下のピューリタンの現状をも意味する言葉となる。ピューリタンにとってチャールズ一世は悪王であり、悪王は打倒の対象である。それはバビロンにおけるイスラエル人の窮状であった。イスラエル人はバビロンにおいてネブカトネザル王打倒は行わなかったが、新バビロニアを征服したペルシア王キロス二世によって帰国を許されることとなったが、イスラエル人の神への従順な姿勢も故国帰国をもたらした要因であった。それと同様チャールズ一世下のイギリス人も神への姿勢を断食と祈りによって示さねばならない。ピューリタンの改革が遅々として進まないのは彼らの緩慢な信仰心に原因があった。ピューリタンが断食と祈りを行いながらも彼らは神との契約に入らなかったことがピューリタンの窮状をもたらした。ピューリタンは「宗教的断食の最も重要な部分」をおろそかにしていた。

You come, *Fast* after *Fast*, to seek God in his House: You forbear your victuals, afflict your soules, endure it out a long time; you pray, heare, confesse your sins, and freely acknowledge that all is just that God hath brought upon us, and that we suffer lesse than we deserve. All this is well. But here is the error, and the true Cause of the continuance of all our evils, and of their growing greater, namely, that all this while we

have never, in any *Fast*, or at any other time, entred into such a solemn and publique *Covenant* with God, as his people of old have often done upon like occasion and exigents⁽²³⁾.

「宗教的断食の最も重要な部分」とは上記の引用からも明らかなように「神との厳粛な公の契約」である。Burges はピューリタンが置かれた状況を“Mystical Babylon⁽²⁴⁾”と呼ぶが、バビロン捕囚後イスラエル人は帰国し、主のために神殿の建設にとりかかった。しかし、ペルシアの反対もあり、その建設は進まず、それと共に「残虐、抑圧、不貞、異国女性との結婚及び他の大きな醜悪⁽²⁵⁾」が残った。しかし、ネヘミアの登場と共に本格的な宗教改革が始まり、断食と共に神との契約も結び、神殿建設も順調に進み、教会も多くの醜悪を取り除かれることとなった。ネヘミアが国をうまく治めることに成功したのは神との契約のためであった。このように Burges は国家の繁栄の基を神との契約が絶対に必要であると考え。ところがイギリスはどうかと Burges は疑問を投ずる。イギリス国内における「バビロン」救出の始まりを Burges はヘンリー八世のローマカトリック教会からの離脱とする。メアリー女王下でのカトリック教復活はあったが神が女王を解職し、人々を救出してくれた。そしてエリザベス女王の下での宗教改革が本格化し、ローマカトリック教会の儀式、迷信、偶像崇拜を根絶することになった。ところが Burges が最も危惧するのはその後のジェームズ一世を経たチャールズ一世下のイギリスが再びバビロンに逆戻りしつつあることである。丁度ヨシアの時代にヨシアの心は神に向いていたにもかかわらず多くの腐敗した聖職者、人々が現れ、彼らは信仰を主張したが実は偶像に明け暮れたように、Burges の時代のイギリス人も同様な道を歩み、バビロン復活を試みている。

...we begin to fall quite back again; and, not only to coast anew upon the brinks of *Babylon*, from whence we were happily delivered, but even to launch out into her deepest Lakes of superstition and Idolatry, under pretense of some extraordinary *pietie of the times*, and of some *good work in hand*⁽²⁶⁾.

Burges は、イギリス人が「バビロンの縁を新たに航行し始めるだけでなく迷信と偶像崇拜の最も深い湖へ乗り出そうとしている」ことを嘆いているが、これはチャールズ一世と側近の Laud カンタベリー大主教の宗教政策への不満である。彼らの暴走を許しているのはイギリス人が神との契約に入らなかったためである。結果としてイギリス人は神との真の関係を維持できないでいる。

...[we] have sate loose from God, and so have not joyned together as one man, zealously to propugne his trueth and Ordinances, and to stand by him and his Cause, as becomes the people of God, in all just and warrantable wayes, against all opposers and gainsayers⁽²⁷⁾.

神の真実、布告を守るべく神との一体化を目指すべきなのに逆に神から離反しているのが実状である。それは「神の民」にはふさわしくない。イギリス人は神の選民である。だから神の選民にふさわしく神と契約を結ぶべきであるというのが Burges の主張である。神との契約なしではいたずらに「誤った事柄を矯正することへの無駄な希望⁽²⁸⁾」を抱いているだけである。バビロンから帰国したイスラエル人は全国民に神との契約入るように訴えたが、それと同じようにピューリタンもチャールズ一世下の「バビロン」からの脱却を願うならば今こそ神との契約に入るべきだと Burges は下院議員に説くのである。イギリス人はイスラエル人と同じ道を歩んでいると考える Burges にとって旧約聖書のイスラエル人の行動の軌跡はそのままイギリス人にもあてはまる。モーゼのエジプト脱出後の荒野での神との契約、ヨシュアのカナンでの契約はいずれも難局を切り抜けた後の神との契約である。イギリスもこれまで多くの難局に遭遇した。その代表的なものがスペインの無敵艦隊襲来と火薬陰謀事件で、その他にも多くの悪や恐怖があり、すべてが神との契約を人々に求めていた。同様に今ピューリタンが直面している宗教改革に際しての多くの困難な状況のなかで何が彼らに求められているかと言えばそれは神との和解、神との契約以外にはない。神との契約によってピューリタンは神の「力」「英知」「配慮」を獲得し、神を味方にすることができる。だから「神自らに十分な力、英知、配慮がある

とすれば、あなた方が失敗することはありえない。あなた方に対して向けられるどんな武器も成功はせず、どんな陰謀も地獄の門もあなた方に打ち勝つことはない⁽²⁹⁾。」ピューリタンが成功しないのは神との契約がないからである。Burges の *The First Sermon* はピューリタン革命が行き詰まりを見せている中での説教であった。ピューリタンはイギリス社会を建て直し、新しい国家建設に燃えていた。しかし、その熱意は空を切っている。それはなぜかと幾度となく Burges は疑問を投げかける。彼が到達した結論はピューリタンの神への姿勢である。改革が道半ばであるのはピューリタンの信仰心の薄さである。これを Burges は指摘する。ではその薄い信仰心を強化するにはどうしたらよいか。それには旧約聖書を見本とするのが最善である。とにかくイギリス人は神の民である。神から特別に選ばれた民である。その同じ神の選民であるイスラエル人に解決の糸口を見いださうというのが Burges の説教の狙いである。Burges がピューリタンの原型を旧約聖書のイスラエル人に求めていたことは確かである。彼らの行動の指針は旧約聖書のイスラエル人である。そのなかでも Burges が最も取り上げたかったのはバビロンからのイスラエル人の帰国であった。なぜイスラエル人はバビロンに捕囚されたのか。なぜイスラエル人が再びエレサレムへ帰国できたのか。このイスラエル人のバビロン捕囚とバビロンからの帰国から Burges は1640年のイギリスを見ようとした。イスラエル人がバビロン捕囚という苦難・労苦へ追いやられたのはイスラエル人の神への不従順が原因であると Burges は考えた。そのイスラエル人が再び帰国できたのは彼らが神に対して祈りと断食によって従順な態度を取り戻もどしたからに他ならない。イスラエル人のバビロン捕囚と帰国を Burges は1640年にピューリタンが直面していた難局打開のために利用した。Burges が説教を行った1640年11月17日は長期議会が11月3日に開催されているので長期議会開催14日後である。チャールズ一世による議会無視の「専制の11年」の後、議会は王に対する不信感を強め、まずは教会改革の必要性を訴えた。その手始めがチャールズ一世側近の Stratford 伯と宗教界の大物 Laud カンタベリー大主教の逮捕である。彼らは結局処刑されるが、1640年11月前後のイギリスはまだ混乱の時期にあった。ピューリタンが主導する改革がうまくいかないこともあって、彼らに

は焦りと不満があった。そこで議会は「断食説教」を行い、もう一度神への敬虔な姿勢を表し、神の加護の下で改革を成功に導こうと試みた。その最初の説教がBurgesの説教であった。説教において神の言葉が読まれ、聞かれて、人々が悔い改め、神へ戻れば、人々の罪は許されるだろうと議会は考えた⁽³⁰⁾。それで議会は断食説教を行い、神へ従順な態度を表し、神からの援助を基に改革を成功へと導くことを計画したのである。Burgesはピューリタンの苦境をバビロン捕囚のイスラエル人にたとえた。バビロン捕囚のイスラエル人と1640年のイギリス人は同じ境遇にあるというのがBurgesの説教の背後にあった。イギリス人が現在の苦境から逃れる術は旧約聖書に記されている。バビロン捕囚から無事故国へ帰国できたイスラエル人と同じように、ピューリタンも今の苦境から逃れることができる。それは神への真摯な態度を今一度取り戻し、そして神と契約を結ぶことによってである。Burgesは説教で何度も神との契約を強く述べるが、この神との契約があつてイスラエル人はバビロンから帰国でき、故国再建を成し遂げた。同じようにピューリタンも神との契約によって直面する難局を乗り越え、国家を繁栄へと導くことができる。Burgesの説教はいわば神との契約によってピューリタンが現在の難局を打破することができるのかを説いた説教であると言える。ピューリタン説教家によるピューリタンのための説教がBurgesの説教であった。この説教はピューリタンの特徴を伝えるに十分な説教でもある。その一点目は「神の選民」としてのイギリス人が強く訴えられていること、二点目は一点目と関連してくる旧約聖書重視の態度である。これは数字にも表れている。1640年11月から1645年10月までの説教のうち123は旧約聖書からで26が新約聖書からそれぞれ説教の題材を選んでいる⁽³¹⁾。新約聖書も「黙示録」がほとんどで終末論的なテーマが説教の主題で、これも大淫婦バビロン、ローマ・カトリック教会の終焉を預言する書である。これらの事実はピューリタンがいかに旧約聖書のイスラエル人と同一視しているか、いかに彼らが古代イスラエル人にたとえて国の再建に奔走しているかを如実に示している。イギリス国家の再建はピューリタンによるチャールズ一世打倒によって初めて行われることになるが、それが実現するのはこの説教の9年後であるが、Burgesの断食説教後王党派との激しい戦いがピューリタンを待ち受けるこ

とになる。

3. Burges の火薬陰謀事件記念説教

Burges は断食説教を行った約1年後の1641年11月5日、下院で火薬陰謀事件記念説教を行った。それまでは国教会派説教家による火薬陰謀事件説教が多く、ピューリタンによる記念説教は Burges の説教が最初である。断食説教で Burges は旧約聖書を全面的に利用し、ピューリタンの改革を援護したが、火薬陰謀事件記念説教でも Burges は旧約聖書を盾に火薬陰謀事件を非難する。

Burges が説教に選んだ聖書の一節は「詩篇」76章10節で、それは以下の通りである。

Surely the rage of man shall praise thee, the rest of this rage shalt thou restrained.

この一節は人間の怒りが神に対して全く意味のないことを述べた一節である。この「人間の怒り」が火薬陰謀事件で示されたカトリック教徒の残虐性であることは明白である。Burges の説教は一言で言えばこの「人間の怒り」といかに神が「人間の怒り」を静めてきたかについての説教である。Burges が「詩篇」76章10節から得た ‘observation’ は以下の3点である。

1. The rage of the wicked against God and his people is bottomlesse and endlesse.
2. Let the rage of the Wicked men be what it will, it shall onely raise that Glory to God, and benefit to his people, which the Wicked never intended, and ever shall fall short of that issue, which they chiefly projected.
3. The experience of Gods over-ruling, and mastering the rage of man in times past, is an undoubted assurance of the like, for all times to come⁽³²⁾.

1と2の ‘observation’ は、神への人間の怒りには限界がないこと、人間の怒りに好きなようにさせても結局は神の栄光を高め、失敗に終わり、人々への利益を

起こすだけであることを述べているが、3番目の‘observation’は極めて重要なピューリタン説教家 Burges の根幹に関わる問題を提示している。なぜならそれは過去に神が人間の怒りを抑えたことは将来においても必ず同様なことが生じる、と言っているからである。そのための論証として Burges があげるのが聖書である。聖書特に旧約聖書に神への人間の怒り、反乱の事例を見つけ、それらがすべて神により失敗に終わることから Burges は同様なことが今後も生じうると確信しているのである。これはピューリタン説教家の特徴をよく表している。ピューリタンと言えば特に聖書を重視した人たちであるが Burges は聖書から問題の解決を図ろうとする。すべては聖書によって解決できるという強い確信を Burges は抱いている。だから Burges は2で過去におけるイギリスにおけるカトリック教徒による反逆を列挙し、それがすべて無に帰したことを述べる。その最も顕著な例は1588年のスペイン無敵艦隊のイギリス襲撃と1605年11月5日の火薬陰謀事件である。両事件ともすべて失敗に終わったのは聖書の人間の怒りとその失敗の記述から十分に予想されたことであった。Burges は次のように言う。

That wicked men shall be so farre from attaining those ends, which in their rage they drive at, that they shall be sure to meet with a stop, where they made themselves most sure of going on, and be occasion of promoting the good of Gods party, which they meant to destroy⁽³³⁾.

悪人は怒りにまかせて目指す目的を達成することはできず、彼らは必ず阻止される。彼らは目的を達成できないばかりか逆に彼らの破壊の対象である神の一味の幸福を促進する機会を提供することになる。聖書が悪人の成功を記したことはない。彼らはすべてが滅びる運命にあることは Cain と Abel, Esau と Jacob, エジプト人とイスラエル, Saul と David, Absolom と David, Babylon と Daniel, Pilate と Christ の対立からも明白である⁽³⁴⁾。Cain, Esau, エジプト人, Saul, Absolom, Babylon, Pilate はすべて敗者となり、彼らの悪が繁栄したことはない。それでは火薬陰謀事件はどうか。事件の凶悪さを指摘する Burges は従来の説

教と変わらない。従来の国教会派説教家による火薬陰謀事件説教は (1)火薬陰謀事件と類似した事件を聖書から選ぶ (2)事件の凶悪さ (3)ジェームズ一世の事件からの奇跡的な救出 (4)聖書の一節を事件に適応する (5)事件を未然に防いだジェームズ一世称賛 (6)ジェームズ一世救出に対する神への感謝、から成っている。Burges の説教はこの手順によっているがすべてがこの手順通りではない。(1)については問題はない。(2)についても事件の凶悪さを指摘する Burges は従来の説教家と変わりはない。事件は “the most barbarous, execrable, hellish Treason that ever came within the hopes of the most savage and unnatural Assassinate⁽³⁵⁾” で、古代ローマの Caligula ですら計画しなかったと事件である。Burges は事件の計画者のジェズイットの不正を指摘するが、「ルカ伝」のサマリア人焼却をイエスに提案する弟子たちを引用し、イエスを侮辱したサマリア人に対してすらイエスは復讐をしなかったと言う。サマリア人事件も火薬陰謀事件と同様宗教の違いが原因だった。イエスの弟子の言うように宗教が異なるからサマリア人を焼却できるのが問題であったが、イエスはそれに強硬に反対した⁽³⁶⁾。イエスは破壊の人ではなく救いの人であるというのがイエスの反対の理由だった。事件は実行されたら実行犯の一人の Garnet 自身も事件を嫌ったであろう程の死者をもたらず事件であった。事件は “a cruell and outrageous Villany⁽³⁷⁾” で “Nothing but rage and wrath, Conspiracie and crueltie, Teason and Rebellion⁽³⁸⁾” である。Burges の説教で最も注目すべき点は事件を引き起こしたカトリック教徒への激しい非難である。カトリック教徒による反逆の一覧とカトリック教徒による陰謀の歴史を詳細に記載するほど Burges はカトリック教徒の反逆性を警戒している。Burges は強い口調でカトリック教徒を信用したり、寛容な態度を示したりしないように訴える。

I urge this the rather at this time, not only because the very *Deliverance*, which wee this day celebrate, rings loud in your eares, neither to trust nor tolerate them any longer, and strongly moves for a *Ne admittas*, against them; but because also, even during this very Parliament, you find the old spirit of *rage and trechery*, walking too openly, and boldly among them, and too often pressing too neere upon you⁽³⁹⁾.

国会会期中でもカトリック教徒の「怒りと裏切り」が巷を闊歩しているとカトリック教徒への警戒心を Burges は表している。更には寛容を訴えるカトリック教徒にはより警戒すべきである。Burges はカトリック教徒について記憶すべき4点を列挙する。

1. They have never been quiet, but continually contriving of Treasons, ever since the Reformation of Religion.
2. this practice is not from the Lawes made against them, but their very Religion it selfe leades them unto it.
3. their Priests are bound to infuse these principles of their Religion into them, and to presse the use of them upon all occasions.
4. to induce their Disciples to swallow those Principles, and accordingly to act them when occasion serveth, they propound great rewards and glory to such as shall attempt them, and defend and magnifie those who have formerly miscarried in them⁽⁴⁰⁾.

ここにはカトリック教徒が絶えず反逆をたくらんでいること、彼らの宗教そのものが反逆の宗教であること、カトリック聖職者が信者へ反逆を教えていること、反逆を実行した者への報酬と栄光、失敗した者への擁護、称賛の実体が挙げられている。これらは具体的には教皇教書、異端破門、教皇によるカトリック教解放、教皇への絶対服従を意味しているのであるが、イギリスとローマ・カトリック教会との過去の関係をみても、確かに教皇は破門を行い、カトリック教徒は宗教にかこつけて反逆を行ってきた。彼らは報酬や栄光をえさにして反逆を試みさせ、人々の良心や感情を腐敗させた。だからカトリック教徒に寛容であってはならず、彼らを信用してはいけない。カトリック教徒への不信を激しい口調で述べる Burges は国教会派の説教家と変わりはない。火薬陰謀事件から得た教訓は(1)敵への警戒(2)悪人の悪は終わる。神が悪人と悪人の腕を折ることを神に祈る。(3)神との平和。神とつつましく歩むことである⁽⁴¹⁾。ピューリタン Burges のピューリタンの特徴は何かと問われれば、それは聖

書への全面的な依存であると言わねばならない。前年の断食説教でも顕著に表れていた聖書からの問題解決がこの説教にもはっきりと見られるのである。Burges の火薬陰謀事件記念説教は、最初に事件の凶悪さの指摘、次に事件実行犯カトリック教徒及びカトリック教会への不信へと続き、事件失敗を聖書から例証し、最後に事件予防のために聖書に即した生き方を励行することで終わる。すべてを聖書によって解決しようとする Burges の姿勢は断食説教と同じで、他のピューリタンの説教家と同じである。説教の手順のうち(3)のジェームズ一世の事件からの奇跡的な救出については神の慈悲強調に言及されるが(5)の事件を未然に防いだジェームズ一世称賛と(6)のジェームズ一世救出に対する神への感謝については記述がない。これはピューリタンが反王制の立場をとっており、王賛美はできなかったからであろう。仮にジェームズ一世を賛美する立場を取れば、現国王のチャールズ一世に対してはどうか。ピューリタンはそもそもチャールズ一世体制打破を改革の最大目標に掲げていた。(5)と(6)について Burges が言及しないのはピューリタンとしては当然すぎることであった。説教においへ Burges が強調したかったのはカトリック教会・カトリック教徒の反逆性である。Burges がその反逆性を特に激しく攻撃するのは説教直前の10月にアイルランドおけるカトリック教徒農民による反乱と関連している。この反乱でプロテスタントは数千名殺害され、しかも反乱にはローマ・カトリック教会が関わっていたと思われていた。火薬陰謀事件の実行犯とアイルランドの反乱農民は同じカトリック教であるゆえに Burges は彼らの反逆性を激しく非難するのである。Burges の説教は従来の説教家の説教とほぼ同じ手順で進められるが、一つだけ異なる点がある。それは上記にあげた3番目の‘observation’である。これは断食説教にも通ずる聖書の記述からの将来の予測である。これは Burges がいかに聖書に全幅的な信頼を寄せているかの表れであり、それはまた聖書抜きにしてはピューリタンを考えることはできないことを明白に示している。

4. 火薬陰謀事件と旧約聖書

火薬陰謀事件の最大の奇跡は事件が未然に終わったことであり、イギリス人はそこに神の介在を認め、説教家はこぞって神がイギリスを救ってくれたと神の慈悲を称えた。Borges は、イスラエルが神への反抗故に敗北を喫した例を挙げ、すべてに秩序をもたらす神がいるから敵の怒りによって失敗することはないことを強調する。

We can never miscarry by all the rage of all the enemies in the world, so long as we betray not our selves into their hands. For, there is a God that sets and orders all, as we shall see....⁽⁴²⁾

Borges は神の力が人間の怒りを止めさせ、それを破る例として「出エジプト記」のファラオを取り上げる⁽⁴³⁾。彼はエジプトを脱出するイスラエル人を捕らえる直前に神が介入し、ファラオはその計画を実現することはできなかった。旧約聖書を見ても人間の怒りがその目的を達したことはない。神の力はその助言を実行することにある。いかに悪人が激しく怒ろうとも彼らは死へと走るだけである。悪人が怒っても神は彼らをあざけり笑うだけである。また悪人が使う武器をすべて神は破壊する。これらは単に旧約聖書で起こっただけではない。これらの神の悪への介在は火薬陰謀事件でも実行されている。

How strongly was their plot laid! how secretly, carried! How neer, the execution! how probable, the successes! ...How boldly did they vaunt, that they had gotten *God* himself into Conspiracie! ...Yet even then, we see how admirably *God turned* all this rage to his praise, by preserving of those that were appointed to die, and by giving them up as a prey to death who had destinated so great a sacrifice to *Death* of so many at once. Insomuch as the greatnesse of the danger did not more smite the world with a just amezement, than the extraordinarinesse of the deliverance took all men with high admiration⁽⁴⁴⁾.

火薬陰謀事件の発覚はすべて神の摂理による。

Thus, *He that sitteth in the Heavens, laughs them, their rage, and Counsels, to scorn;* compelling them, at length, to acknowledge the *finger of God* in their *Discovery*, and his arme in their most deserved *Destruction*. O wonderfull *Providence!* O admirable *Justitice* upon them, and *Goodnesse* to his People!⁽⁴⁵⁾

事件直前の発覚はまた神の慈悲による救出でもあった。

...the God of our Mercies hath prevented them, broken the snare, given us an escape, and hurl'd them out of the *Land of the Living*, as *out of the midst of a Sling*. Therefore rejoyce in the Lord, and againe I say rejoyce⁽⁴⁶⁾:

ところが最近では神への感謝が薄れている。至る所で人々の感謝が薄れ、冷やかな態度が見られると Burges は不満を漏らす。記念日をおろそかにする人もいるし、聖職者の中には救出をあざける者もいる。さらには火薬陰謀事件日を“Saint Gunpowder Day”と呼ぶ者さえいる。立派な人でも記念日を守ることに無頓着な人もいる。このような事態は決して許されるべきことではない。なぜならば火薬陰謀事件救出は神の偉大な御業で神だけしか行えなかったものであるから、その神に対して感謝の意を表すのは当然のことである。断食説教で Burges は神との契約を盛んに説いたが、それも神の加護がなくては何事も成すことはできないからであった。それと同じように、神の慈悲への感謝なくしては再び同様な事件を体験することもありうる。だから神への感謝を表明し、神の加護を絶えず味方にしなければならぬ。火薬陰謀事件阻止は「神の御業⁽⁴⁷⁾」であったのである。事件を未然に防いだ神は慈悲を受けるに値しない人々を救出してくれたという意味でも感謝すべきである。悪を行う者の子孫であるにもかかわらず神は手を広く広げてくれた。そしていかなる国家もイギリスほど神の「愛する親切と慈悲」で報われたことはなかった。神のイギリスへの慈悲は

イギリス人が「神の選民」である証拠である。神の救出は全く予期せぬ慈悲の結果であり、神の慈悲は今なお続いている。ところが神の手になる救出に対する神への称賛は十分ではない。神への称賛が十分でない現状を David を例に挙げて次のように言う。David が Absalom の反乱から解放された後ユダの長老たちが David をその館に連れ戻す最後の者となったことはユダの長老たちにとっては「邪悪な汚点」であった。長老たちに Absalom 支持者が多かったためでもあったが、それでも長老たちは David をもっと早く館に連れ戻すべきであった。それを行わない長老たちは David に対して非礼を示した。しかし神への感謝をないがしろにしているイギリス人にとってその汚れと罪はもっと大きい。

But much greater would the staine and the sinne be in You the Elders of our Israel, unto whom the Lord himselfe (upon the same grounds that he hath elsewhere said, Yee are Gods (Psal.82.6)) now saith, Yee are my brethren, yee are my bones and my flesh, should have cause to adde, Wherefore then are yee the Last to bring the King back? ⁽⁵⁰⁾

「わがイスラエルの長老」とは下院議員たちであるが、彼らもイスラエルの長老と同じく神を称える最後の者となっている。Burges は、神への感謝を怠ったがために神からの怒りを受けた Hezekiah や Judah を例に挙げ、イギリスも火薬陰謀事件からの奇跡的な救出に対して神への感謝を怠ると神の怒りが降りかかると警告する。Burges の独自の説教方法は火薬陰謀事件と類似した事件を旧約聖書から選び、そこから将来を予測するものである。ピューリタンにとって聖書は絶対的な神の書である。その神の書の中に火薬陰謀事件と似た事件を見いだし、そこから将来の行動の指針を読み取るのである。Burges は次のように言う。

The Experience of Gods over-ruling and mastering the rage of man in times past, is an undoubted assurance of the like for all to come ⁽⁵⁰⁾

過去における人間の怒りへの神の反対とその怒りへの勝利の体験は来たるべくすべての人にとって同様なことが生ずる疑いえない保証であると Burges は言うが、この言葉こそが Burges の説教の根幹を形成している。神の過去の行動から将来を結論するのは普通であると Burges は言うが、旧約聖書から Burges が過去の体験として取り上げるのは David である。Burges にとって David はことのほかお気に入りの人物で、イギリス人にとって David は格好の見本となる。

David, even in his youth, could be confident of this, *The Lord that delivered me out of the paw of the Lyon, and out of the paw of the Beare, he will deliver me out of the hand of the Philistine.* (1 Sam. 17.37⁽⁵²⁾)

David は若いときの経験から将来の神の救出を確信する。だから Absalom の反乱のときでも David は神の救出を確信し、“I will not be afraid of ten thousand of people that have set themselves against mee round about” (Psal.3.6.) とするほどである。David はさらに “Though I walk through the vally of the shadow of death, I will feare no evill (Psal.23.4)” と述べ、“Surely goodnesse and mercy shall follow mee all the dayes of my life.” (Psal.23.6) と将来への自信と確信を語る⁽⁵³⁾。David にとって過去の苦境からの救出はその後の彼に自信を与える。すべての慈悲はより多くの慈悲の保証となる。Burges が David から得た教訓は、我々に与えられた救出のみならず世界の始めから他の人たちに与えられた救出は苦境と困難にあるすべての神の民に同様の結果を保証する疑いえない論拠となることである⁽⁵⁴⁾。Burges は神の救出の例を David だけに求めるのではない。St. Paul や Moses や Isaac にも同様な神の救出を認めている。Joshua へ対しても神はいつも彼と共にいると言った。それで Joshua は “The Lord is my helper. I will not fear what man shall do unto me.” (Heb.13.5.6) とすることになる。Joshua と同じ苦境にあるすべての神の民に Joshua と同じことがなされる⁽⁵²⁾。Burges はなぜかくも自信に満ちているのか。それは神の本性にある。神は「変わることはない⁽⁵⁵⁾」からである。神の慈悲は消滅することではなく、火薬陰謀事件からの救出

は更に多くの神の祝福の前兆である。

That great Deliverance [from the Gunpowder Plot] we now celebrate, was not as a dead bush to stop a present Gap onely, nor a merry expiring wth that houre and occasion; but, intended for a living, lasting, breeding Mercie that hath been very fertile ever since. It was an in-let to further favours, and an earnest of many moe blessings⁽⁵⁶⁾:

神は多くのすばらしい、計り知れない程貴重な慈悲を示してきている。火薬陰謀事件からの神の救出は何を語っているか。それは今後も神はイギリス人を救ってくれるということである。

...this [the deliverance from the Gunpowder Plot] will be enough to assure you of like protection and preservation for ever. For every one of Gods servants are entitled to all the mercies and glorious works that ever the Lord wrought for any of the people from the beginning of the world⁽⁵⁷⁾.

火薬陰謀事件からの救出は永遠に続く神の保護を確約するものである。しかし、火薬陰謀事件は見事に敗北したのにイギリス人は神への感謝を忘れている。我々に必要なのは同じ慈悲を受けることが出来るよう努力することである。神を信じ、神と共に歩み、神のために立たねばならない。神への十分な感謝を表さなかった例としてバビロン捕囚から帰国したイスラエル人が挙げられる。彼らはエルサレムに神殿を築くことを遅らせ、神への十分な感謝の気持ちを表さなかった。それで神は絶えず彼らを傷つけ、すべての祝福を呪うことになった。ところがイスラエル人が神殿の建設を始めるや、今度は神の祝福が注がれた。

They set upon the building of the Lords House. And the next news was; *Then spake Haggai the Lords Messnger the Lords message unto the people; I am with you, saith the Lord*, That is, now they should find him *with them* to purpose, in carrying up the

building...⁽⁵⁸⁾

神は突然態度を変え、神との契約によってすべてイスラエル人を一体化させ、新しい事態が生じた。神は約束通りで神殿を楽しむだけではなく神殿を建設した人々をも楽しみ、しかも今後神はイスラエル人を祝福するとまで言った⁽⁶³⁾。バビロン捕囚後のイスラエル人が神殿建設後に神の祝福を受けたように、イギリス人も火薬陰謀事件からの脱出に対して神へ感謝を示さなければならない。イギリス人は一つとなって神を祝福しなければならない。

To put all men into a course of *Order* and *Uniformity*, in Gods way, is no to *force the Conscience*; but to set up God in his due place, and to bring all his people into the paths of righteousness and life⁽⁶⁰⁾.

秩序と均一性へと人々を追いやることは良心の強制ではない。むしろそれは神をしかるべく地位に立ち上げることであり、神の民すべてを正義と生命の道にもたらすことなのである、と Burges は言う。この意味するところはピューリタンに対しての一致した団結心である。心をつにして神へ感謝の念を表し、その見返りに神からの祝福を受けるということである。ピューリタンの宗教改革はまだその途上にある。改革のためにまだやるべきことが多くある。間違いを改革する必要がある。だから教会と規律の点において正常でない多くのものを更に改革し、長年みがかれずにあったものを完成させる必要がある⁽⁶¹⁾。ピューリタンの志の実現には神の援護が必要である。ここで Burges は再度 David を援用する。David が神殿を建てることを決意したときに彼には絶えず神の援護があった。

And not onely so, but, when so ever *David* had need of extraordinarie help, God never failed to go out with him whither soever he went. And it is very remarkable, that most of the Great Victories which *David* atchieved, fell to him after his *resolution* of building the *Temple*. For the Text saith it expresly, that *After these things, David smote*

the *Philistines*; and after that, the *Moabites*; then, *Hadadazer*; and then, the *Syrians*, and others, none being able to stand before him⁽⁶²⁾.

David が神殿建設後、彼は多くの勝利を納めることになる。これも David が神に対して十分な感謝の気持ちを捧げたからである。とすれば David と同じ事をすれば神から同じ祝福が注がれることになる。だからイギリス人は David の例にならう必要がある。

And thus would it be with you, when, in zeal for God, you follow his [David's] steps. What ever the difficulties and discouragements be, when Zorobabet fals close to work, what *mountains*, so great and high, that shall not *become a plain*? No plots, no power of hell should prevail against you. Do you carry on Gods work, he will be sure to carrie on yours, and make you the honour and strength of the King and Kingdome in all the Kings Noble designs for the good of his subjects. Those unnatural Rebels that now rage so desperately, should be *but bread for you*; and all your enemies should be compelled to lick the dust of your feet. I shall therefore close all with that of the same *David to Solomon his sonne, touching the building of the Temple. Arise, and be done, and the Lord be with you.*[1 Chro.22.16]⁽⁶³⁾

「今絶望的に荒れ狂っているあの残酷極まる反逆者たち」とはアイルランド反乱への言及であるが、彼らですらイギリス人にとっては「パン」にすぎない。「立って行いなさい」は神への感謝を表すことに怠っているピューリタンに行動を促す言葉である。David にならえば、山も丘になり、どんな計画も地獄の力にも屈することはない。神の仕事を行えば、必ず神も我々の仕事を行ってくれる。Burgess の説教は聴衆に対する激励の言葉で終わる。

これまで Burgess の火薬陰謀事件記念説教を見てきた。従来の国教会説教家の説教と比べるとその内容はほぼ似ている。聖書からの事件に類似した一節を選び、それを事件に適応する、事件の凶悪さ、事件からの奇跡的な救出、事件を事前に防いだジェームズ一世称賛、そして救出に対する神への感謝、これが

国教会派説教家の手順であった。Burges の説教もほぼこの手順に従っているが、大きな違いはある。その一つは事件発覚の糸口を開いたジェームズ一世への賛美が見られないことである。これは王政打倒を叫ぶピューリタンからすれば到底無理なことであった。二つ目は、奇跡的な救出を大々的に描くことはしていないことである。奇跡的な王の救出を全面に打ち出すことによって神の慈悲を強調するのがこれまでの説教の常套的な方法であった。ピューリタン Burges の説教の最大の特徴は聖書、それもほとんどが旧約聖書を援用しながらの説教であることである。その説教は旧約聖書における神の選民イスラエル人と同じ神の選民イギリス人を強く意識した説教でもあった。Burges の説教は一言で言えば事件からの救出に対してもっと神へ感謝の気持ちを表すべきであるのにほとんどの人はそれを忘れている。しかし、Burges は神への感謝がなされないとき何がイギリス人に降りかかるのかを旧約聖書を基にして述べ、ピューリタンに対して神への敬虔な姿勢を示すように訴える、これが Burges の説教の目的であった。そのような神への敬虔な姿勢によってピューリタンは改革を実現へと導くことができる。その意味で Burges の火薬陰謀事件説教は宗教的というよりは政治的色彩の強い説教でもあった。神の援護なくしては何事も成しえない。人間の力を越えた神の援護があって難局を切り抜けることができる。それが Burges の説教の論点であった。

む す び

Burges の1640年11月17日の断食説教と1641年11月5日の火薬陰謀事件記念説教はどちらも「救出」「deliverance」に関わっている説教である。断食説教でのバビロン捕囚からのイスラエル人のエルサレム帰国はバビロンからのイスラエル人の「救出」である。断食説教で Burges が用いたのはバビロン捕囚から帰国したイスラエル人である。彼らは神殿建設により神からの祝福を受け、国家は繁栄する。イスラエル人のバビロン捕囚からの帰国はタイポロジカル的にはイスラエル人→ピューリタン、バビロン→チャールズ一世体制となる。火薬陰謀事件は文字通り事件からのジェームズ一世を初めとした政府の要人の救出であ

る。それはまたチャールズ一世と Laud 大主教のカトリック教化した宗教的支配からの救出にもつながる。いずれの説教でも Burges は徹底的に旧約聖書を利用する。断食説教ではバビロン捕囚、火薬陰謀事件説教では David の利用である。Burges はイギリス・イギリス人を古代イスラエル・イスラエル人として、イスラエル人の体験をイギリス人の体験の基とした。この説教方法は実は国教会派の説教家の常套手段で、彼らも旧約聖書及び新約聖書から一節を選び、それをイギリスに適應した。ピューリタン Burges は新約聖書に依拠することはほとんどなく、もっぱら旧約聖書によって直面する問題の解決を図った。なぜ Burges を初めとしてピューリタン説教家は旧約聖書にあれほどまで固執したのか⁽⁶⁴⁾。それはやはり「神の民」としてのイスラエル人に自らを重ね合わせ、「神の民」としてのイギリス人を強調したかったからに他ならない。これは Wilson の言うところの「規範的先例としての聖書」観である⁽⁶⁵⁾。それはまた停滞しつつあったピューリタン革命が「神の民」によって完成されるのだから、その革命に失敗はありえないことを他のピューリタンに確約するためでもあった。1640年11月17日はまだ長期議会が開催されて日が浅かったが、議会が徐々に王党派に対して優勢を得ていく時期でもあった。チャールズ一世の腹心 Laud 大主教と Strafford 伯の失脚をもって議会派の攻勢が始まる。ピューリタンの更なる結束が要求された時期であった。また、1641年11月5日の火薬陰謀事件記念説教日の1ヶ月前にはアイルランド、アルスターで農民の一揆が生じ、アイルランド反乱はイギリス政府を悩ますことになる。そのアイルランド反乱はカトリック教徒による反乱で、ローマ・カトリック教会が背後で糸を引いていたと思われていた。イギリス国内ではチャールズ一世と Laud 大主教による国教会のカトリック教化に危惧を覚えるピューリタンが多かった。そのような状況の下での火薬陰謀事件説教であった。事件はカトリック教徒の過激派ジェズイットによって引き起こされた事件であった。それも事前に計画が漏れ、ジェームズ一世は奇跡的に救出された。火薬陰謀事件を扱うことによって Burges は二つの点を訴えた。その一つは事件の首謀者のカトリック教徒がいかに危険な存在であるかであった。Burges はそのカトリック教徒の危険な反逆性はいまだにイギリス国内に存在し続けていることを訴える。その最も身近

な例がアイルランド反乱であった。Burges の説教の狙いの二点目は Laud 大主教体制になるイギリス国教会への弾劾であった。チャールズ一世と Laud 大主教は国教会のカトリック教化を目論んでおり、国教会におけるカトリック教の残存の一掃を図るピューリタンにとってはどうしても排除しなければ人物であった。火薬陰謀事件は見方を変えればチャールズ一世と Laud 大主教の支配体制からのイギリスの「救出」でもあったわけである。いずれにしてもピューリタンは国を変えることに奔走した人々である。彼らの革命が成功するにはピューリタンの強固な団結心が必要であった。Burges がそのために利用したのが旧約聖書であった。ピューリタン説教家がいかに旧約聖書に頼っていたかは既に引用したヒルの数字が物語っている。そしてとりわけ説教家のお気に入りにはバビロン捕囚からのイスラエル人の帰国であり、彼らの神殿建設であった。新約聖書に基づく説教もあるが、それらは「黙示録」が主で、ローマ教会の終焉を扱っている。チャールズ一世や Laud 大主教体制派も旧約聖書に依拠していた。しかし体制派の旧約聖書使用はピューリタンと異なり、Solomon 時代の国の繁栄、栄光を扱ったものが多い⁽⁶⁶⁾。ピューリタン説教家がバビロン捕囚とその後の Nehemiah による神殿建設に大きな関心を寄せていたことは体制派と異なりいかに彼らが国政の改革を強く望んでいたかを如実に示すものである。ピューリタン説教家からすればピューリタンの行動は先行きが極めて不透明である故、なんとかして不透明な先行きに明るい見通しをつけたかった。それには聖書の利用しか他に方法はなかった。神の書たる聖書にイギリスが直面する難局と同様な事件を見つけ、それをイギリスに適応する。聖書では神がイスラエル人を助けた。ならば同じ神の民であるイギリス人をも神が助けないことはない。ピューリタンは狂信的なまでに聖書を信じ、彼らの行動のお手本を聖書に見出したのである。しかしピューリタンの旧約聖書依存は一つの大きな問題を投げかけている。それは神の契約は神の選民だけを対象にすることである。神によって選ばれた人のみが神との契約を許され、救出される。その意味ではピューリタンの宗教は一部のものにしか適応されない普遍性を欠く宗教であり、特定の一部の人のみが神の恩恵に授かることができることになる。Burges の説教は断食説教にしる火薬陰謀事件説教にしる神の選民だけが

対象の説教である。これはピューリタン革命の今後を占ううえで看過できない点である。ピューリタンの行動がわずか短命で終わったのはピューリタンが神の選民であることも関係があるのかしれない。いずれにせよ Burges の二つの説教はどちらも旧約聖書を全面的に利用し、ピューリタンが直面する問題の解決を図っている点でその後の説教家に与えた影響は大きな説教であった。

注

- (1) Christopher Hill, *The Collected Essays of Christopher Hill. Volume Two: Religion and Politics in 17th Century England* (Sussex: The Harvester Press, 1986), pp. 129-130.
- (2) Cornelius Burges, *The First Sermon Preached to the Honovrable Hovse of Commons now assembled in Parliament at their Publique Fast. Novem. 17. 1640* (London, 1641), p. 65. 以下本論では *The First Sermon* と略記する。
- (3) *The First Sermon*, p. 35.
- (4) *The First Sermon*, p. 35.
- (5) *The First Sermon*, p. 13.
- (6) 旧約聖書の訳については『旧約聖書』（日本聖書協会、1962）を使用した。
- (7) Zaretによれば Burges は「契約」を240回も使用している。(David Zaret, *The Heavenly Contract* [University of Chicago Press, 1985, p. 151.]
- (8) *The First Sermon*, p. 14.
- (9) *The First Sermon*, p. 17.
- (10) *The First Sermon*, p. 16.
- (11) *The First Sermon*, p. 14.
- (12) *The First Sermon*, p. 35.
- (13) *The First Sermon*, p. 36.
- (14) *The First Sermon*, p. 37.
- (15) *The First Sermon*, p. 38.
- (16) *The First Sermon*, p. 38.
- (17) *The First Sermon*, p. 38.
- (18) *The First Sermon*, p. 40.

- (19) *The First Sermon*, p. 41.
- (20) *The First Sermon*, p. 49.
- (21) *The First Sermon*, p. 49.
- (22) *The First Sermon*, p. 49.
- (23) *The First Sermon*, p. 50.
- (24) *The First Sermon*, p. 50.
- (25) *The First Sermon*, p. 50.
- (26) *The First Sermon*, p. 54.
- (27) *The First Sermon*, p. 55.
- (28) *The First Sermon*, p. 57.
- (29) *The First Sermon*, p. 60.
- (30) Christopher Hill, *The English Bible and the Seventeenth Century Revolution* (London: Penguin, 1993), p. 80. 本書の第3章には特に教えられるところが多い。
- (31) Hill, p. 83.
- (32) Cornelius Burges, *Another Sermon Preached to the Honorable House of Commons now assembled in Parliament, November the Fifth, 1641.*, p. 9. 本論では以下 *Another Sermon* と略記する。
- (33) *Another Sermon*, pp. 8-9.
- (34) *Another Sermon*, p. 9.
- (35) *Another Sermon*, p. 13.
- (36) *Another Sermon*, p. 17.
- (37) *Another Sermon*, pp. 18-9.
- (38) *Another Sermon*, p. 19.
- (39) *Another Sermon*, p. 19.
- (40) *Another Sermon*, p. 20.
- (41) *Another Sermon*, p. 36.
- (42) *Another Sermon*, p. 36.
- (43) *Another Sermon*, p. 37.
- (44) *Another Sermon*, p. 44.
- (45) *Another Sermon*, p. 46.
- (46) *Another Sermon*, p. 46.
- (47) *Another Sermon*, p. 47.

50 *Another Sermon*, p. 49.

50 *Another Sermon*, p. 50.

52 *Another Sermon*, p. 50.

53 *Another Sermon*, p. 51.

54 *Another Sermon*, p. 51.

55 *Another Sermon*, p. 52.

56 *Another Sermon*, p. 54.

57 *Another Sermon*, p. 57.

58 *Another Sermon*, p. 62.

63 *Another Sermon*, p. 63.

60 *Another Sermon*, p. 64.

61 *Another Sermon*, p. 64.

62 *Another Sermon*, pp. 64-5.

63 *Another Sermon*, p. 65.

64 Hill は旧約聖書と新約聖書を比較して、次のように言っている。

“The Old Testament is harsher and more brutal than the New, concerned with the indiscriminate collective elimination of God’s enemies, and with the salvation of the Jewish people, rather than with individuals.” (Hill, pp. 74-75)

65 John F. Wilson, *Pulpit in Parliament* (New Jersey: Princeton, 1969), p. 144.

66 Achsah Guiborry, “Israel and English Protestant Nationalism: ‘Fast Sermons’ during the English Revolution” in David Loewenstein and Paul Stevens eds., *Early Modern Nationalism and Milton’s England* (Toronto: University of Toronto Press, 2008), p. 115.
本論文からは Hill の書同様教えられる点が多い。

References

Paul Christianson, *Reformers and Babylon: English Apocalyptic Visions from the Reformation to the Eve of the Civil War* (Toronto: University of Toronto Press, 1971)

Godfrey Davies, M.A., *The Early Stuarts* (Oxford: At the Clarendon Press, 1937)

William Haller, *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution* (New York and London: Columbia University Press, 1963)

J. Sears McGee, *The Godly Man in Stuart England* (New Haven and London: Yale University Press, 1976)

Thomas Stephen Nowak, "Remember, Remember, The Fifth of November": Anglocentrism and Anti-Catholicism in the English Gunpowder Sermons, 1605-1651 (PhD Dissertation, State University of New York at Stony Brook, 1992)

Paul S. Seaver, *The Puritan Lectureships: The Politics of Religious Dissent* (Stanford: Stanford University Press, 1970)

Tai Liu, *Discord in Zion: The Puritan Divines and the Puritan Revolution 1640-1660* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1973)

Hugh Trevor-Roper, *The Crisis of the Seventeenth Century: Religion, the Reformation, and Social Change* (Indianapolis: Liberty Fund, 1967)